

魔法の medicine プロジェクト 活動報告書

報告者氏名：石田実香 所属：群馬県太田市立鳥之郷小学校 記録日：2021 年 2 月 20 日
キーワード：生活支援、見通し、自己肯定感

【対象児の情報】

- 学年 A 児：小学 5 年生の男児
○障害名 高機能自閉症 注意欠損多動性障がい（AD/HD）
○障害と困難の内容

〈学習面〉

- ・小学 2 年生より特別支援（情緒）学級に在籍。国語・算数は特別支援（情緒）学級、他の教科や活動は協力学級で学習をしている。
- ・昨年度から iPad を活用した学習に取り組んでおり、iPad を使い慣れている。
- ・学習の遅れはないが、視覚優位で得意不得意の差が大きい。
- ・本人の好き嫌いや関心意欲によって取り組みに差があり、気が向かない課題はなかなか取り組めない。
- ・授業中に発言をしたくなると、指名をされる前に勝手に喋り出したり、離席して教師の側へ行ったりする。
- ・長い時間の姿勢の保持が苦手で、集中力が途切れると、椅子から降りたり、離席したりする。

〈生活面〉

- ・普段の学校生活は特別支援（情緒）学級をベースとし、国語・算数以外の教科と給食は協力学級で過ごしている。
- ・学年相応の生活習慣（上靴を下駄箱に片付ける、脱いだ衣服をたたんでしまう、授業に合わせた学習用具の準備や片付けなど）が身に付いていない。
- ・物の管理や整理整頓が苦手。

〈行動面〉

- ・こだわりが強く、活動の切り替えが苦手。
- ・目の前に気になるものやことがあると、衝動的に関心がある方へ気持ちや体が向かってしまう。
- ・周囲のペースに合わせたり、状況や相手の気持ちを考えたりすることが苦手。
- ・集団のルール（静かに話を聞く、場所を勝手に離れない等）を守れず、周囲とトラブルになることもあり、時には手が出たり、教室を飛び出したりすることもある。

〈コミュニケーション〉

- ・人なつこく話し好きだが、人の話を聞くことが苦手で、一方的に喋り続けてしまう。
- ・吃音があり、焦ったり緊張したりすると、上手く言葉が出にくい。

【活動目的】

○当初のねらい

- ①時間を意識して、学習や活動に取り組むことができる。
- ②集団のルールを意識して、活動に取り組むことができる。

○修正後のねらい

- ①決められた順番で、活動に取り組むことができる。
- ②当番や係の仕事を通して、友達との適切な関わり方を意識できる。

- 実施期間 2020年6月～現在
- 実施者 石田実香
- 実施者と対象児の関係 特別支援（情緒）学級 担任

【活動内容と対象児の変化】

○対象児の事前の状況

Aくんは、目の前に気になるものやことがあると、やるべき活動を忘れて、衝動的に関心がある方へ気持ちや体が向かってしまう傾向がある。また、やるべきことの優先順位が付けられず、目の前の課題や活動がなかなか進まないことも多い。そうした様子は学校生活の様々な場面で見られ、6月当初は日々のルーティンである朝の準備や帰りの支度さえ、とても時間がかかる状態であった。

また、Aくんは相手の気持ちを理解できなかつたり、集団のルールを守れなかつたりする傾向がある。こうした実態から、小学2年生より特別支援学級にベースを置いて学校生活を過ごしており、協力学級では周りに助けてもらって当たり前と感じているような言動が見られた。さらには、協力学級での学習や活動に渋りがちで、「どうせ、協力学級へ行っても…」と後ろ向きな発言が多く、協力学級への所属意識の希薄さや自己肯定感の低さが伺われた。

6月当初、マインドマップ（図1：アプリ「Simple Mind」）でAくんの思いをまとめてみたところ、Aくんは友達が好きという気持ちが強く、人と関わりたいという欲求が高いことが分かった。そこで様子を観察すると、Aくんは明るく人なつこい性格で、特別支援学級の児童とは誰とでも仲良くすることができ、休み時間はいつも楽しそうに過ごしたり、一緒に下校をしたりする姿が見られた。

一方で、協力学級の友達と関わる姿はあまり見られず、協力学級の友達と関わりたいものの、上手く関わりが持てないことから、協力学級での活動を避けているような様子も感じられた。



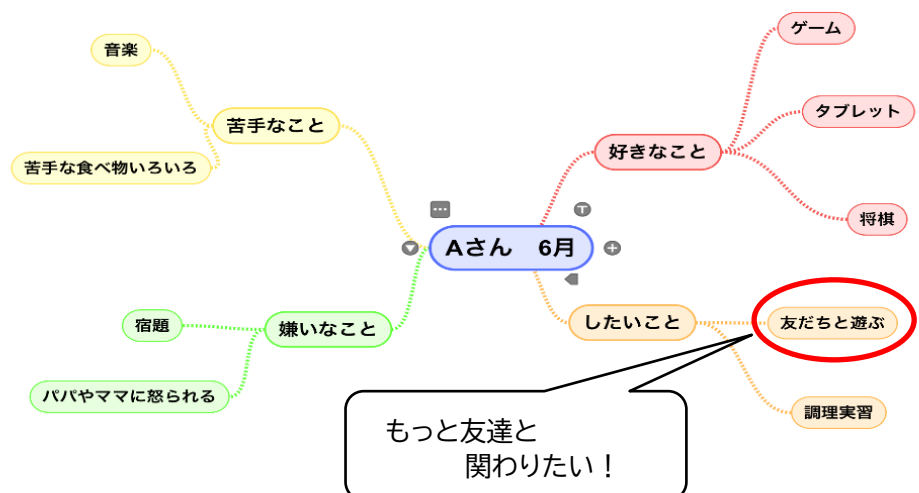
何から手をつけていいか検討を付けられず、荷物が床に散乱し、なかなか帰りの支度が進まない。



音楽の授業に参加できず、誰もいない協力学級前のベンチで、寝そべて読書を始めてしまった…

マインドマップ

図1:Aくん 6月のマインドマップ



○活動の具体的内容

①「決められた順番で、活動に取り組むことができる」ために

- ・リマインダー機能のあるアプリ「Google keep」の活用（6月～9月）

活動の見通しをもち、決められた順番で朝の準備や帰りの支度ができるようになることを習慣づけるために、iPadによるリマインダー機能のアプリを用いることにした。

Aくんは登校時間がルーズで、その日の気分によって、学習用具の準備や提出物の提出に時間がかかってしまう様子が見られた。また、下校の準備もその日の気分によって取り組みが様々で、持ち帰るものが多い金曜日は何から手をつけていいか検討をつけられず、非常に時間がかかる傾向にあった。

そうした様子から、「Google keep」に『朝の準備』『帰りのしたく』としてやるべきことを順番で示し、取り組んだらチェックをしていくようにした。さらに、週末に持ち帰る荷物の準備や支度がある日は、『月曜日の朝の準備』『金曜日の帰りのしたく』という別のリマインダーも作成し、準備や支度の内容に合わせてリマインダーを活用できるようにした。

- ・チェック機能のあるアプリ「やることカード」の活用（10月～）

「Google keep」の活用も有効ではあったが、顕著な効果が見られなかったことから、やるべきことをより具体的に示し、短時間で毎日のルーティンに取り組むための手立ての工夫が必要と考えた。

そこで、「いつ」「何を」やるべきなのか1つ1つ写真やイラストで分かりやすく示し、取り組んだらそのつどチェックできるアプリ「やることカード」を活用することにした。朝の準備や帰りの支度の際には、このアプリを開き、1つ1つ持ち物等の準備や片付けができたならチェックをしていくことで、日々のルーティンがスムーズに取り組めることをねらった。

このアプリは活動を順番通りに取り組んでチェックをすると、その都度いろいろな種類の魚のイラストが出てくる仕掛けになっている。そこで、全種類の魚を集めることができたならAくんの好きなことができるようにし、取り組みへの意欲を高められるようにした。



Google keep

Google keep によるリマインダー

通常の荷物の準備や支度の日

朝の準備

- ☐ ランドセルをしまう
- ☐ おたより袋を先生に出す

帰りのしたく

- ☐ 連絡ノートを書く
- ☐ おたより袋をしまう
- ☐ ランドセル準備をする

週末に持ち帰る荷物の準備や支度がある日

月曜日の朝の準備

- ☐ ランドセルをしまう
- ☐ 月曜バックをしまう
- ☐ おたより袋を先生に出す

金曜日の帰りのしたく

- ☐ 連絡ノートを書く
- ☐ おたより袋をしまう
- ☐ ランドセルを準備する
- ☐ 月曜バックを準備する



やることカード



・座席の見直し（10月～）

本学級は活発な児童が多く、パーテーションで区切るのは危険という理由から、当初は広い空間に間隔を空けて座席を配置していた。しかし、Aくんにとっては周りの情報が丸見えで、やるべきことに集中できる環境ではなかったことも、朝の準備や帰りの支度の取り組みに支障をきたしていると考えた。

そこで、座席を壁に向けて周りをロッカーや棚で囲み、周りの情報をなるべく遮断できるようにした。また、ロッカーが座席から遠かったことも、身支度に時間がかかる原因と考え、座席のすぐ近くのロッカーをAくん専用にし、ロッカーまでの導線を短くすることでよりスムーズな取り組みを目指した。

ロッカーまでの導線を短くするため、ロッカーの近くに座席を配置することにした。



座席を壁に向け、周りをロッカーや棚等で囲むことで、周りの情報をなるべく遮断し、集中して活動に取り組めることをねらう。

②「当番や係の仕事を通して、友達との適切な関わり方を意識できる」ために

Aくんが周りのために活躍する経験が乏しいことから、決められた当番や係の仕事を実践に取り組む経験を積みながら、みんなに認められたり自己肯定感を高めたりする中で、「友達との適切な関わり方」を意識できるようになればと考えた。

まずは、高学年としての活躍ができ、本人が意欲を持って取り組める活動として、放送委員会の仕事に着目した。今年度から、Aくんは委員会に所属することになった。本人の希望である放送委員会に所属が決まり、活動を楽しみにしている様子から、放送委員会の活動を通して、自分のやるべき仕事に責任を持って取り組むことをねらうことにした。

・リマインダー機能のあるアプリ「カレンダー」の活用（6月～）

Aくんは放送委員として、1週間に1回、校内放送の当番を任されることになった。

そこで、カレンダーアプリに当番の予定を入れておき、カレンダーアプリのリマインダー機能により、毎週の活動を忘れないようにした。

放送委員の仕事は、放送機器に興味があり、楽しみにしている活動のため、忘れずに活動しようという意識が高く、進んでカレンダーアプリにスケジュールを入力しようとする姿が見られた。時間になったらアラームで知らせる機能も、進んで設定していた。



・「カメラ」「写真」アプリの活用（6月～）

Aくんが係や委員会などの活動に取り組む姿を撮影し、Aくんのお気に入りの先生など見てほしい人に頑張る姿を見てもらい、称賛してもらうことで、本人の意欲や自己肯定感を高めることにつなげていくことをねらった。



カメラ



写真

○対象児の事後の変化

①「決められた順番で、活動に取り組むことができる」ために

6月中旬から、実践者が主導で「Google keep」の活用に取り組ませるようにしたところ、Aくんはすぐに使い方を習得し、7月上旬には一人でチェックをしながら、朝の準備や帰りの支度ができるようになった。さらに、7月中旬頃には、やるべきことの文字に関連するイラストを自分で入力するなど、より使いやすくしようという姿が見られるようになってきた。しかし、「Google keep」を自分なりにカスタマイズすることにこだわってしまったり、周りに気になることがあると気がそれてしまったりと結局時間がかかってしまうこともあり、顕著な時間短縮には至らなかった。

そこで、2学期よりチェック機能のアプリを「やることカード」に切り替え、座席の配置を工夫したところ、顕著な時間短縮が見られ、決められた順番通りに朝の準備や帰りの支度に取り組む習慣が身に付いてきた。



iPadは昨年度から学習で使っているので、リマインダー機能やチェック機能のあるアプリの使い方をすぐに習得できた！

②「当番や係の仕事を通して、友達との適切な関わり方を意識できる」ために

カレンダーアプリのリマインダー機能により、当番の日にはiPadに委員会活動のお知らせが出ていると、「あ、今日は放送当番だ！」と嬉しそうに言う姿が見られ、時間になると進んで放送室へ行く姿が見られるようになった。また、吃音のため原稿を読むことに苦手意識があることから、「ぼくは原稿を読むのは苦手だから、CDをかけたいんだけど。」と自分から伝え、同じ当番の児童に仕事の調整を依頼する姿も見られた。

さらに、2学期になって当番の時間が変更になり、掃除の時間に放送当番をすることになった際には、「今は掃除の時間だから、放送室の掃除をしようかな。」とCDをかけて手持ち無沙汰になったAくんは、自分から箒と塵取りを手に取り放送室の掃除を始めた。この様子を撮影し、先生方に見せて称賛してもらうと、とても嬉しそうにしているAくんが印象的であった。



自分から気付いて放送室の掃除をする姿が見られるように！

【報告者の気づきとエビデンス】

○主観的気づき

A くんにとって学習で使い慣れている iPad を、生活面での困難と思われる場面（やるべきことがスムーズに進まない、自己肯定感が低い）に活用する取り組みをしたことで、A くん自身も iPad を学習場面だけでなく生活の場面にも使えることに気づいてもらえたと感じている。特に、こだわりが強く、衝動性の高い A くんにとって、リマインダー機能やチェック機能のあるアプリによって、やるべきことの優先順位を決め、順番通りにチェックをしながら活動に取り組ませることは、とても有効であることが分かった。また、写真やカメラのアプリを活用し、少人数での場面や個別の支援があれば意欲的に活動することのできる A くんのを、係や委員会の仕事の場面だけでなく、学習などいろいろな場面で撮影した。こうした映像を、多くの先生方に見て頂き称賛してもらうことで、A くん自信や自己肯定感を高めることにつながっていったと考える。

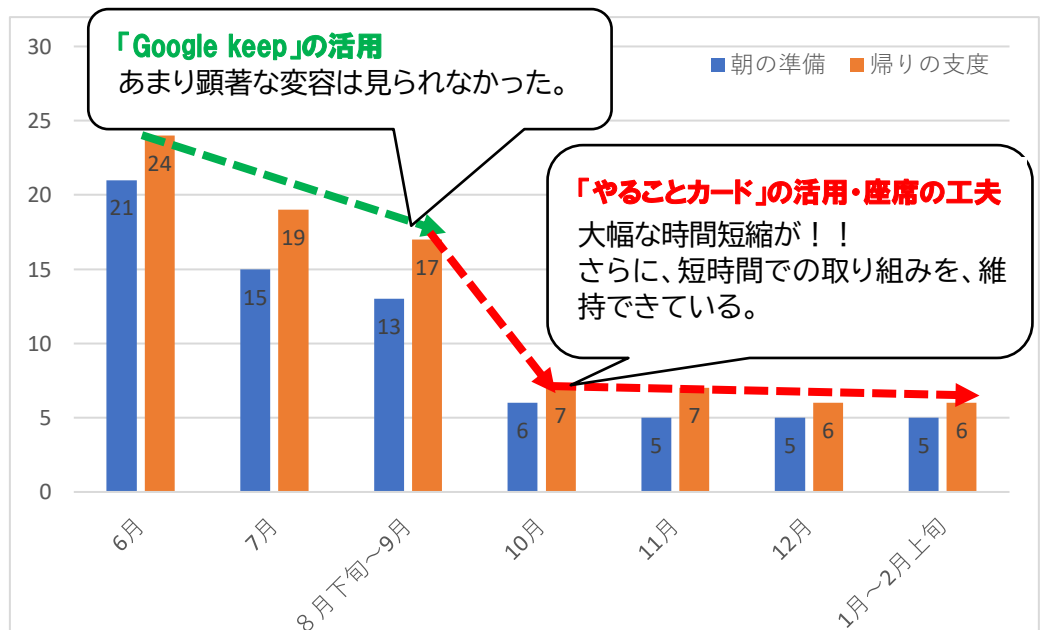
今後、GIGA スクール構想により、通常の小学校である本校も近々 Chromebook が一人一台導入されるが、これまでの iPad も併用しつつ場面に合わせた活用が望ましいと考える。そして、A くん成長に合わせて、有効に活用できるような指導および支援の工夫を継続して取り組んでいきたい。

○エビデンス（具体的数値など）

①「決められた順番で、活動に取り組むことができる」ために

グラフ 1 は、「朝の準備・帰りの支度」にかかる平均時間を、約 1 カ月ごとにまとめた様子である。6 月から 9 月は「Google keep」の活用により、実践当初に比べると、緩やかながら平均時間が短くなってきていることが分かる。しかし、「Google keep」を自分なりにカスタマイズすることにこだわってしまったり、周りに気になることがあると気がそれてしまったりと結局時間がかかってしまうこともあり、顕著な時間短縮には至らなかった。

そこで、10 月から「やることカード」の活用を取り入れ、座席やロッカーの配置を工夫したところ、大幅に時間が短縮したことが分かる。その後、現在に至るまで短時間で取り組んでいることから、活動の習慣化ができたと考えられる。ちなみに、「やることカード」と座席の工夫は同時に取り入れたため、どちらの手立てがより有効であったかは不明であるが、「やることカード」は活動の習慣化に、座席の工夫は時間短縮により有効に働いたのではないかと考える。今後も A くん生活支援において、実態に即したチェック機能やリマインダー機能のアプリを使いつつ、環境調整に配慮していくことが望ましい。



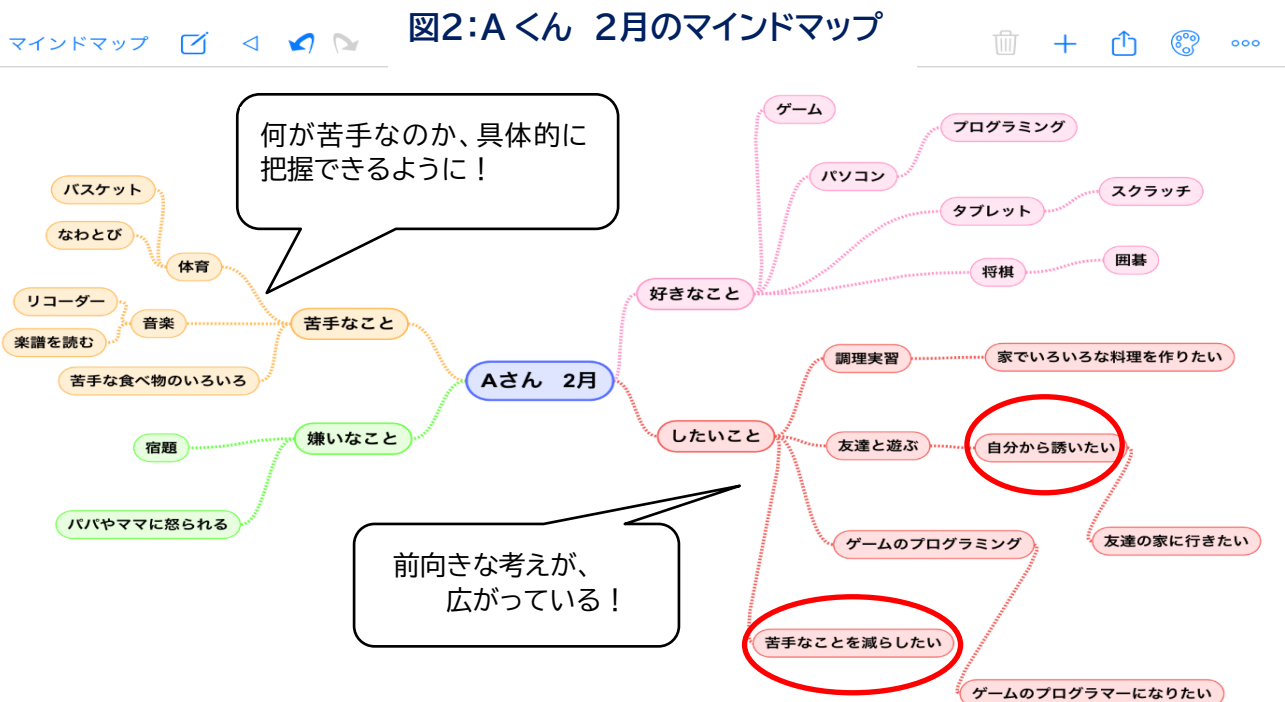
グラフ 1: 朝の準備・帰りの支度にかかる平均時間

②「当番や係の仕事を通して、友達との適切な関わり方を意識できる」ために

リマインダー機能のアプリで当番や仕事の時間を知らせて、活動を促しつつ、取り組む姿をカメラアプリで撮影した。撮影した映像は、A くんのお気に入りの先生や関わる先生方に見て頂き、称賛して頂くよう働きかけた。さらに、仕事をする場面だけでなく、学習の場面でも少人数での取り組みや個別の支援があれば意欲的に活動できる姿を撮影するようにした。そして、特別支援学級で補った学習（器楽、英会話、ミシン縫い等）の様子を撮影した映像は、担当の先生に見て頂き、授業の評価につなげてもらった。

こうした積み重ねが A くん自信につながり、2月のマインドマップ（図2：アプリ「Simple Mind」）では、「好きなこと」や「したいこと」などポジティブな考えが広がってきたことが明らかに分かる。「苦手なこと」もやや広がってはいるが、何が苦手なのかを具体的に把握できるようになり、「苦手なことを減らしたい」と答えていることから、苦手なことにも前向きに挑戦しようという気持ちが芽生えてきたことが伺われる。また、「友達と遊ぶ」の先に、「自分から誘いたい」ということを答えており、より積極的に友達と関わりたいという気持ちが表れてきていることも分かる。

今回、友達との適切な関わり方までは残念ながら支援が及ばなかった。しかし、これまで集団の中では頑張る姿や良さを発揮しにくく、周囲に認めてもらう経験の少なかった A くんが、映像を通して頑張りを周囲に理解してもらえるようになったことで、自信や自己肯定感を高めることができたと考えられる。こうした自信が、友達作りへと踏み出すきっかけになれば良いと考える。



○その他エピソード

2月に入り、マインドマップでAくんの現在の気持ちをまとめたその翌日、Aくんから「このクラスに5年〇組の友達を連れてきてもいい？」と聞かれたので、「もちろん」と答えると、休み時間に数人の協力学級の男子児童を特別支援学級に連れてきた。遊びに来た児童たちとAくんの他に、本学級の児童も交えて、カードゲームや工作などをして楽しそうに過ごす姿が見られた。その後、どうして友達を誘おうと思ったのかをAくんに聞いてみたところ、「マインドマップを作りながら話しているうちに、協力学級の友達を誘ってみようと思った。」とのことだった。

その後も、休み時間になると、Aくんの協力学級の男子児童が遊びに来ることが多くなってきた。また、これまで特別支援学級の中で過ごすことの多かったAくんだが、ある時協力学級の児童が「校庭でサッカーをしよう」と誘いに来てくれ、校庭で協力学級の児童たちとサッカーを楽しむ姿も見られるようになった。

協力学級の友達とも進んで関われるようになったAくんの成長を嬉しく思うとともに、今後は、友達との適切な関わり方を意識できるような指導を取り入れ、より豊かな交友関係を築いていけるよう支援をしていきたい。

来年度、Aくんは6年生に進級し、小学校生活も残り1年となる。自分のやりたいことに少しずつ挑戦できるようになったAくんの成長を認めながら、中学校への進学を見据え、さらなる成長を促していきたい。

協力学級の友達を連れてきて、カードゲームなどをする姿が見られるようになった。



協力学級の友達に誘われて、校庭で遊ぶ姿も見られるように！